

第1回高知県社会教育委員会（平成31年4月1日～平成33年3月31日任期）会議概要

令和元年5月28日（火）9:45～11:45
高知共済会館3階 藤の間

- 1 開会（9:45～10:05）
 - （1）高知県教育長挨拶（次長代読）
 - （2）自己紹介
- 2 社会教育法及び高知県社会教育委員条例等について（10:05～10:10）
- 3 委員長及び副委員長選出（10:10～10:13）
委員長として内田委員、副委員長として時久委員、川田米實委員が選出された
- 4 議事（10:13～11:45）
テーマ：地域全体で子どもたちの成長を支える社会教育のあり方について
～「厳しい環境にある子どもたち」を社会教育の視点から支える方策～
 - （1）テーマ設定について
 - （2）2年間のスケジュール
 - （3）本県の社会教育資源の現状と課題
 - （4）意見交換
 - （5）次回現地視察の選定について

【事務局より社会教育法及び高知県社会教育委員条例等について説明】資料1参照

【質疑・協議】

（委員長）

皆様よろしくお願ひいたします。今の社会教育委員の制度について、法律を含めて教育委員会から説明がございましたけれども、私なりの理解では、この委員会は、県民、或いは市町村の住民の、学習や文化、スポーツに伴う教育的なニーズを行政の施策に反映させる仕組みと捉えており、そこに大事な役割があると考えています。私はそこ（教育的なニーズを行政の施策に反映させる重要な役割があること）を踏まえておきたいなと思っているわけです。

そういう意味では、住民と言いましたけれども、県民はどういう教育ニーズを抱えているのだろうか、或いは市町村はどういう教育ニーズを抱えているのだろうか、それを県の政策に活かすことができるだろうかということをしつこく上げる。ここが社会教育委員の制度のもともとの趣旨なんだろうというふうには思っているわけで、そんなところを踏まえながら進めていければと考えております。

それでは議題に入りますけれども、最初のテーマ設定は事務局からの報告になります。

【事務局よりテーマ設定について説明】資料2参照

（委員長）

ここまで事務局からご紹介のありました資料を中心として、何かご質問等ありますでしょうか。

これまでの社会教育委員の会議ですと、例えば、手元に配布されている社会教育実践交流会のチラシがありますが、この社会教育実践交流会を発足させたきっかけというのは実は社会教育委員会の提言なんですよね。この会議があって実践交流会が始まるわけです。

それから、資料にはありませんけれども子ども達の体験活動においても、県でより重視して、幼児期から発達に

合わせた形で青少年の家を中心に学校等に呼びかけ、長期的な体験もできるようなプログラムを始めているわけですが、それも実は社会教育委員の会議の提言が一つのきっかけになっています。

そういう意味では昨年度も提言を出していただけていますが、その中でも幾らか反映させていただいてるところがあると思うんですけども、家庭教育のところはどんな形で動き始めているのか、いようとしているのかということと、それを含めて、この会議としてはなにか先ほどの申したような施策に少しでも反映させていくという意味では、どんなことができるかっていうことを考えていきたいので、家庭教育のところではなにか動きはありますでしょうか。

(事務局) 前回の社会教育委員会の提言を受けての動きについて説明

昨年度提案いただいた中で、親の世代が体験活動を十分にしていないので、それ(体験)が子どもに伝わらないというご指摘がありました。子どもだけでなく、親子で体験活動推進していくべきとのことで、今年から新たに、幡多青少年の家で親子キャンプを行うほか、以前から実施していた野市の青少年教育センターの親子キャンプも拡大して実施する予定です。

また、森林環境税を使う長期宿泊事業についても、3泊4日と敷居が高かったところを、2泊3日からでもできるように、少し拡充して体験活動の厚みを少し持たせています。

それから家庭教育支援基盤形成事業では、社会教育委員の研修会に呼ばれたときに少し宣伝させていただきまして、担当の方に使い方とか事例を紹介させていただいております。

もう一つ、ずっと続けてきたこととして、高知家の親の育ちを応援する学習プログラムを、地域子育て支援センターや幼稚園、保育園にまで拡充して、就学前の子どもの親の横の繋がりができるような仕組みづくりということで広報させてもらっており、月2、3回ぐらいの割合で担当者と養成したファシリテーターが、保育園、幼稚園、支援センターにおじゃまして保護者の繋がりを築くきっかけづくりをしているところでございます。

今年度には、12月1日に子ども達の生活習慣改善に向けて、早ね早おき朝ご飯フォーラムという大きな企画も用意しております。また改めて宣伝させていただこうかと思っておりますけども、いろんな切り口から家庭教育支援をしてみたいです。

(委員長)

この前の3月に出した家庭教育支援の施策もこんな形で政策化されているというようなところがあります。

今言っていたようなことが少しずつ動いとるとということも踏まえながら考えていきたいですね。親子体験の機会なんていうのは、土佐山アカデミーでもね、いろいろやれそうなのという感じでもありますし、そういうところに青年団が関わることもあったり。

若い青年達が子育て世代のお父さんお母さん達と交流する機会っていうのは、実は子どもだけでなく、自分たちの勉強にもなっているようなことだったりもして、いろんなことも考えさせられるわけですね。

そんな形で、これまでやってきた提言が活かされているということと、今回のテーマをどう見通していこうかなというところなんです。

それでは少し先に進めさせていただきまして、議題としては2年間のスケジュールのことと、それから公民館、図書館や各種団体の状況など、高知県の社会教育資源をお話いただきながら意見交換をしていきたいと思っております。それぞれ日頃活躍してらっしゃる方達ばかりですので、その辺りの話も踏まえながらご発言いただければと思います。

それでは先に進ませさせていただいて、2年間のスケジュールと本県の社会教育資源の現状と課題についての説明を続けてお願いします。

【事務局より2年間のスケジュールと本県の社会教育資源の現状と課題について説明】資料3参照

(委員長)

ありがとうございました。最初に2年間のスケジュールの話をしていただきました。それから、今の現状と課題というところがありました。まずはスケジュール資料に関しまして何かご質問等はございますでしょうか。

要は少しスピード感を持つというか、今年度にあっても、来年度の予算に反映できるものに優先順位をつけて意見していくために、9月ぐらいには来年度の施策にこれだけは入れて欲しいというものを出して、方向性を決めていこうということですね。来年度に関しては、8月を目処に提言をまとめる。そんなスケジュール感でやっているかということですね。

ではご報告をいただいた資源の現状と課題というところですが、社会教育はもともと団体、施設、職員、もうひとついえば予算という感じなんですけれども、社会教育というのは一般には団体と施設と職員と言われていたわけですね。或いはそういう区分けで整理されているわけですね。それぞれの今の既存の団体の姿や施設の姿、それから職員の現状についてお話をまずいただいたということですが、ここも多くの課題があるということですね。

もうひとつは、新しい動き、可能性みたいなところで、地域学校協働本部のことですか、子ども食堂ですか、或いは子育てサークル支援センターのような、従来の社会教育でやってきた団体とか施設とは少し異なる形のところもあり、そこをどうするか、ということにも繋がる。そういったお話があったわけですが、いずれにしてもどこも課題があるということですね。

なにかいまご紹介いただいたことについてご質問、ご意見ございますでしょうか。

(委員)

民間組織について、他にも県の環境共生課が窓口をしている、えこらぼ（環境支援センターえこらぼ）さんの子どもエコクラブというのがあるんですね。かつては盛んだった活動も、現在は約10団体ぐらい（9クラブ31名令和元年6月6日現在）まで数を減らしている団体があって、何とかならないかということ、私にも相談がきている組織があるんです。どうしたらいいのでしょうかみたいなことで、連絡いただくんですけど、新しいことをしないといけないと心配だと思うんですが、そのあたりは県の環境共生課が環境省と関係している団体なので、様子を聞いていただいてですね、この社会教育委員会の協議と合わせて、団体が復活していったり元気になっていくということがあったらどうかと聞きながら思っていました。環境を守る子どもたちの活動なので色々できることはあると思います。

(委員長)

はい、ありがとうございます。資料4の3ページにある図に関してですね。なかなか図を書くというのは難しいですよ、あれもこれも入れたくなるし。でもこういう図を出していただいているのはすごくいいことなんです。学校外での子どものクラブ活動とかサークル活動とか、体育文化活動など、まだまだいろいろあるかと思えますけど、そういうものを、もう少しここに反映できないだろうかというような話ですよ。具体的にはエコクラブっていうのがありましたけれども、これはユネスコのESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）という言葉との関連ですけど、学校外で子ども達のクラブ活動、サークル活動というのがもう少しやれそうだと思いますよ。ボーイスカウト、子ども会、スポーツ少年団、海洋少年団、そして青年団、婦人会、これらはいわゆる社会教育関係団体の類型に入りながらずっと大事にしてきた捉え方ですけど、もう少しこの図に今のような視点をいれたらどういうふうに見えてくるんだろうかっていうお話なんです。だから図を書くって言うのはなかなか難しいんですけど、そういうのはもうちょっとありそうな感じもいたしましたが、公民館もあれば図書館もあり、実は博物館もあるし。社会教育関係施設というのは公民館だけではないのもう少し入れたくなるので、図を巡っても現状理解という点では、ご意見はいろいろあると思いますけど、現状を整理していただいてすごく良かったと思います。

まだ他にもあると思いますし、そういう意味で、最初に申しあげました団体施設、いわゆる従来の社会教育がついた関係団体、職員という枠組みをもう少しこう広げながら、どう考えるかといったところですが。

青年団ではどうですか。今は子ども会とかボーイスカウトとか、青年団に入るまでの生活経験やクラブ体験が途切れているために、なかなか入り手がいないですよ。今青年団にはいつている人っていうのはボーイスカウト経験とか子ども会経験者とかは多いですか。

(委員)

経験のないメンバーも多いですね。

(委員長)

なにかご発言とかありますか。他のところでももちろん、現状というところですね、高知県の社会教育条件の乏しさと言うんでしょうかね、そういうのが見えてくるわけですけども。

(委員)

高知県の状況が非常によくわかる資料を作っただいて、非常にありがたかったんですが、やっぱりこれらを見るにつけ、団体の維持というか、団体活動の維持といった、そういうものが薄らいで来ているなっていう感覚を持ちます。

消費社会にもう動いていってしまっ、お金出して楽しいものだけ、上辺だけいただければいい。創造活動の中で作り上げていく喜びをセンサーとして受けとめられないというか、何かそういうものが根底にあるんだろうな。

特に少年団体でみますと、親の世代がすでに消費社会にどっぷり浸かってるので、親が何かを引き受けて子ども達のために、っていうこともやらない、商業施設に任せてしまうというか、非常に興味深かったことで、親子で遊びましようっていうことの投げかけをすると、どこにいったらいいですかってなる親が多いんですね。親子で遊びましようっていうえば、家の中でもいっぱい遊べるし、公園でも遊べるし、何か商業施設に行かないと遊んだっていう認識がないっていうところに驚きを感じました。やっぱりそういうところがあるんだなって。

一方で、先日、福岡県の社会教育実践交流会に参加してきました。そこで大阪の演劇をやってる若者たちに出会いました。17年ぐらい続けてるということでした。なんでやめないの…って私は尋ねました。他に楽しいこといっぱいあるでしょう、若いのにって。24歳の子が答えました。大学のころは演劇活動から離れていました。でも物足りないんです。本当に上辺は楽しいんだけど、何かこう魂が踊らない、と。

すごい若い人もいるんだなあと感じたことでした。それは何かというと、感動体験があったっていうところなんですよね。中学生の頃に沖縄にいて、沖縄の小学生が自分達の歴史を演劇にして、それを見せてくれた。その感動で自分達もやりたい、と。

やっぱり感動体験が、必要なんだなということを改めて感じたところなんですけど、感動体験もなく、育ってしまっ、消費社会の中で生きていけば、まあこうなるわなあといういうことを、何か寂しい思いを持ちながら数字を見て感じました。

(委員長)

ありがとうございます。ほんとにそんな背景がありますよね。世代のことを考えれば、まさに親の世代がもうどっぷり消費社会に浸かってきているわけだから。どこからアプローチをしていったら、一番良いのかっていうことなんですね。一方で物足りないと感じている若者やそういう子達もやっぱりいるわけですから。そのきっかけに、社会教育がまだまだ大事だということなんです。

ありがとうございます。いかがでしょう、全体見ながらご意見はありませんか。

それぞれ活動されてらっしゃることについて、資料を持ってきていただいているわけですけども、そのご報告と関連付けながらでも、ご発言をいただけるといいんですけども。少し意見を出し合いながら、どこら辺から協議を深めていこうか探るようなところがありますが、いかがですか。

(委員)

この社会教育委員会の中で厳しい環境にある子ども達への支援ということで、青年団というか、自分達が社会教育でできることを今お聞きして考えてたんですけど、最近自分の同級生達も親になる人が増えてきていますが、自分の家庭だけで完結しているから悩みとか溜まってしまったり、相談する場がなかったりしているように感じています。もちろんこうした現状に対しての取組をされている方はたくさんいると思うんですけども、いろんな世代が集まっているところに出ていくような機会もなければ知らない、みたいな状況が根底にあると思っ、だからこそ社会教育が非常に大事だなあと感じています。その上で、じゃあ皆が集う場ってどこにあるんだろうって思ったとき、町内会とかでも行われている夏祭りとか地区民運動会とか、昔から続いてきているものが実は皆が集う場になっていたのかなあと感じました。だけどそういった場に若い人達が来ない、参加しない現状があ

ります。

自分達は高知市の旭で動くことが多いんですけども、旭の地区民運動会とかに自分達が行くと、全競技で活躍できるくらい若い人達が少なくなっています。

そこで、今年は旭に住んでいる若い人達をいかに、誘い出し、一緒に盛り上げるかというところを目標にしている、具体的には町内会の若手支部を作ろうと今考えています。それこそPTAの皆さんにも、お化け屋敷でお化け役たりないですと回覧板を回してみたり、地区民の会議で募集するなど地道にやっついこうかなというところですね。

さらに、この会の中でできることはないかなって考えたときに、公の場に社会教育の魅力を発信することってというのは、自分達青年団が頑張ってもなかなか難しいところがあるんですけど、社会教育委員会だからこそ対外的な発信はすごい大きな力を持っていると感じて、例えば社会教育実践交流会もそうですけど、尾崎知事の目に触れる発表とか、そういったことを最終的にできて、動いた後に提言をまとめることができたなら社会教育の魅力を発信などにも繋がっていくのかなと、そんな風なことをお聞きしながら感じました。

あと、自分達青年団のメンバーの中にも社会福祉協議会の職員がいたりするんですけど、例えば社会福祉協議会の会の中で発表する場などがあれば、社会教育団体と他機関がより連動・連携していけるのかなと思いついたところですね。

(委員長)

ありがとうございました。提言を出すとか、ここで話し合ってるっていうことの意味の一つは、やっぱりその社会教育の魅力とか、必要性みたいなことを発信していく。そこに非常に大事な点がありますよね。そういう場になんとかできないかということで、いろいろ考えていきたいと思いますということですね。

知事に知らせるといことはもちろんすごく大事なんですけど、知らせればいいというわけでもないですよ。先ほど委員の発言にもありましたが、閉塞状況にありながらも、そのこと自体が自覚されていないので、閉塞感を危機として感じていかなければならない。危機として感じていけば、まだ何か取組や活動をやりたいとかっていう動きとかになるんですけども、閉塞状況自体が当たり前になっていっているということですよ。この状況乗り越える難しさがありますよね。或いはそういうところにどういうふう伝えるか、魅力を感じてもらおうかというところが大事になるんだろうなあと思いますよね。

そこで、厳しい環境にあるというのは協議のテーマにもなりますけれども、そういう人ほどそうした状況から開放されていくような手立てと距離があるわけで、その溝をどういうふう埋めていったらいいのかというところですね。全体的な状況としても、危機を危機と感じてない閉塞状況だと思うけど、それを閉塞だと感じていない状況があるわけで。今の話を伺う中でそんなところにこの会の意味があるかなって感じがしますね。いかがでしょうか。PTAではどういう感じなんでしょうかね。

(委員)

PTAとしましては、まさに、本テーマについては、非常にありがたいといえますか本当に当事者である保護者でもありますから、その立場の中で、常日頃から考えていることでした。県Pでも年に1回土佐の子育て交流会っていうのをやるんですけども、何かやりますよといったときに積極的に関わってくれる人もいて、そういう方はPTA会長さんとか、役員さんなど、何かしらアンテナを張ってる方とかであって、会などに参加されたとき、いいと感じたことを持って帰り、各学校で実践に移してくださるのですが、実際に厳しい環境にある子どもたちの保護者の方のところまでは届いてない、届かないというところがあります。

こうしたことから、最近は両輪なのかなって考えるようになりました。意識高い人達、どこに何があるか、どうしたらいいか、というアンテナを張り巡らせている人達には今の現状のやり方でより良いものをブラッシュアップしてお伝えしていくっていいのかなと考えています。ただし、厳しい環境にある子ども達とその保護者の方は別のところにアンテナがあるのかな、フィールドが違うのかなとPTA会長を1年間やらしていただいて、思っています。本当の厳しい環境は僕とかに見えてないところだと思うんですよ。灯台元暗しかもいいんですけども、自分の学校の自分の子ども達のクラスの中にそういう人達がいるのかもしれないですけども、自分が普段いるフィールドにその保護者の方がこない。じゃあその保護者はいったいどこにいるの。子どもは学校に来てる

から絶対親は家にはいるはず、だけどその保護者の方に情報を届けるにはお便りだけじゃちょっと届かないんですよ。多分こういうことだと思います。こういう子育て支援ありますよ、っていつて手紙を出しても駄目、綺麗な言葉で文書を出しても駄目ってなると、なんかちょっと違うアクションを考えなければならないのかなあと。子どもをみんなで支えていこうとしている中で、当事者であるその子の保護者の意識が向かない限りは、最終的に犠牲になるのが子ども達っていうのもわかっているんで、ちょっとアプローチの仕方もあるかなって思っています。その発信する仕事がPTAの役割だと思ってますので。もんだことを最終的に保護者に渡すのはPTAの役目だと思っています。

(委員長)

ありがとうございます。PTA会長さんが仰っていたフィールドが違うっていうあたり、ここでも協議したいですね。何かフィールドが違う、見えてない、何を見ているのか、どういう状態なのか、私たち自身が考えないといけないところではあるんですよね。ありがとうございます。

(委員)

私どものところには、子どもさんの発達特性上育ちに困難を抱えているという状況で給付決定を受けた方がたくさんくるんですけど、本当に厳しい状況にあって、今言われたように、PTAでもなかなか来ない或いは子育て講座をやってもなかなかいけな。本当に苦しんでいるという人達がまさに我々の目の前にいる訳なんですけど、お子さんが生まれても授乳ができない、寝かしつけることができない、お風呂に入れることもできない。中にはお母さんがおうちでお風呂に入ることができなくて、私のところへ子どもを連れてきてお風呂に入って帰るといような方もおられたりします。そういう中で、目の前の人達と日々接するんですけど、通所して来られる方が唯一フィールドなんです。そういう中で、子やらい体験広場だとか、子育て、手抜き子育て指南しますとかいうふうなことを、来てくれている人たちを対象にしています。そうすると子どもさんが一緒に来てくれるので。そういうことをしているのですが、今言われてるように、いろんなイベント、或いは体験活動へ参加できない子達がたくさんいて、そこは非常に厳しい状況ですね。私どもが見ている多くの親御さんは子どもさんと遊べないんですね。体験活動をやっていないまま親御さんになっているので、この間はナイフすら使えない保護者さんがいっぱいでした。土佐山アカデミーさんでも同じじゃないですか。

(委員)

はい。

(委員)

そういう状況なんですね。私は体験活動は遅いということではなく、気付いた時から始めたらいいと考えています。今他の委員さんとも言われたように、旭を中心として未加入の方々をいろんなところへ巻き込んでいくということは非常に頼りになることなんだろうと思います。で、我々も子育て講座やります言うたところでなかなか厳しい、お集まりになれないということで、何かと一緒に、療育と一緒に引きつけるか、そういうふうなことをやっていくと、子育て力っていうのが、その人なりに身についていくんですけど。子どもがなぜ言うことを聞けないのだろう、どうしてなついてくれないのだろう、今言ったばかりなのにどうしてわからないのだろう、さっきはできたので今度はできない、など。発達の特性上同じことを言ってもできないんですよ。こうした中で悩みを抱えていきます。子育てに不安になって、自信がなくなって、自分自身の不信に繋がっていつてという状況があります。私どもの立場でできることもあれば、PTAで、そこで厳しい環境の人たちにどういふふうな手立てを打てば一緒にやっていけることができるかっていうことを考えるなど、それぞれの分野でやっていくことが大切だと思います。我々も子育ては伴走をしましょうと言ってるんですけど、今一番大切だと感じているのは親支援です。親支援をしないと子どもは育ちません。今の環境では子どもをターゲットに取組を行ってもなかなか育っていかないです。そこで、親と一緒に子どもを育てていくということを粘り強く、地道にやらなければならないと思っています。そんなことがいろんな分野でできていったらいいんじゃないかな。多分ね、いろんな学校、児童クラブ、放課後子ども教室などもそうです。一緒に遊べていない子どもが必ずいます。言うことを聞かない子どもが必ずい

ます。そのために支援の人に怒られている子どもが必ずいます。その子達は怒られたって絶対わからないです。特性上理解ができないからです。怒られるとパニックになります。或いはキレてしまいます。我慢ができなくなります。よく気をつけて見ていただいたら遊べていない子ども、他の子ども達は列に1列に並んでいるけどどうしても並べない子ども、そういう子どもが必ずいます。こうしたところを気をつけながら、行事をやっていくことを考えていただくと、厳しい環境の子どもが、親御さんが参加できるようになるんじゃないかなと思いますね。

前回の社会教育委員会でも言いましたけれども、私のところの行事に来て、初めてひとりじゃないんだと思えたっていう保護者さんがおられます。それから、この子は何もできないと思っていたんだけどやればできるんだな、って思ったっていう保護者さんもいます。それから、こんな人もいましたね。今日初めて子どもを叱ることがなかったと。

つまりなぜ叱るかっていうと、一般的な行事に参加をすると、そうした子どもはいうことを聞けないので、しつこいとかいろいろな形で他の人から注意をされます。それにより保護者さんもパニックになります。子どもを叱ります。自分の子どもになんで言うことを聞けないのか、なんで何回言ってもわからないの、と言って叱ります。なのでイベントが楽しめなくなる。つまりは、体験活動ができなくなって、次からは、参加できなくなります。という状況があるので、そこら辺をやっぱり支援をしていくときには、或いは体験活動を仕組んで行くときには、そんなことをいろいろ考えられるようなことを社会教育委員会でも少し議論したらいいのかなという気がしています。私が今思ってることはそんなことです。

それから、県内の児童発達支援センターのうち2つを私どもが田野町と日高村とでもっています。田野町は新興住宅地ですけど、日高村の方は旧の農家の在所です。地域の中の民家を借りてそこへ仮設の建物を建ててやっていますので、そこでは少しこの社会教育委員会でも今回議論になるような地域の人達を子どもの療育の現場に取り込んでいきたいなと思います。そして、一緒に子どもたちを育てる仕組みを作りたいなと思って、そういう意味では社会教育委員会の皆様からいろんな意見が出たことを参考にしつつ我々も考えていけたらいいのかなと。そこで森岡さんが今言われた昔からやられていた行事など、そういったことにも、ふらうらんどに通所してくださる子どもさんと地域をうまく絡ませることができないかなあということを考えており、そんな仕組みがあちこちでできたら良いのかもかもしれませんね。私のところは療育の専門機関なので、特別な事情や特性を活かしてやっているということもあるので、他の施設や団体にはできないことでしょうけれど、似たような仕組みはいろんなことでできるんじゃないかなと思いますのでそんなこと（子ども達と地域の融合）ができればええかなと思いますね。

(委員長)

ありがとうございます。先ほどくらの話からだ社会教育が従来扱ってきた団体や施設の現状をお話ししていただきながら、その中でどういうふうに厳しい状況にある子どもたちと向き合う状況をつくっていくかというところで、いろんな分野があるんだというのは仰っている通りで、それぞれの分野でそういう環境をどういう風に作っていくかっていう視点と方法のようなものを提案するっていうのも一つ、方向としてはありますよね。先ほど（事務局からの情報提供の中で）ボーイスカウトについても、高知県ではこんな試みも始めてますよっていうご報告もいただいておりますけれども、もう少し内容や方法に踏み込んだ形で、何が提案できるかっていうようなところですね。そのためにはひとの問題になってくるんですけども、それぞれの団体や施設が抱えている現状もありながらも中身を今回のテーマのようにするには、どんなことができそうかというところで、共通した部分を提案していくのかというのがあるかだと思いますね。新しい試みのところも、改めて考えていく必要があるかもしれない。

(委員)

あと一点だけです。まだ行政の方々のお話の中では、子どもが置かれている現状の中で、「それは家庭の責任だ」、という発言がよくみられます。そこに対しても子どもは家庭だけでは担いきれないっていうことを発信していくことが大事じゃないかなと思いますね。

(委員長)

ありがとうございます。ほかにはいかがでしょうか。それぞれやっつけるところからのご発言もあつて

構いませんが。

(委員)

僕たち土佐山アカデミーの今年からのコンセプトは「ねえ、次、何して学ぶ？」っていうことで、次何して遊ぶみたいな感じで、学ぼうと。遊びと学びの境界線を崩していこうというのが僕らのやり方で、さっき委員長が言われた、面白い軸ってところにフォーカスをしてそのひとつのことから、どれだけたくさん学び出せるかみたいなことを設計することに僕らは興味がある団体です。

7月の27日にそうめん流しを企画しているのですが、竹が生えすぎてるといふ地域の課題を使って、それ(課題)をつかってそうめん流しをするけど、どうやったら人が集まるのかなと考えた中で、世界最急角度・世界最速のものにしてみようと思いつきました。そのためには、地域のおじいちゃんのかや、JALの航空力学エンジニアを呼んで流体力学を駆使してみたり、そうめん流しなんだけど、その中で物理も学べるし、おじいちゃんとのコミュニケーションも学べるし、たくさんどこだって学ぶことができるわけです。他にも竹の削り方も学ぶこともできる。そういう設計をすることに興味がある団体なんです。よくコミュニティで関心軸(関心がある人が集まる軸)と地域軸(地域を中心に集まる軸)があるとされているところで、僕らは楽しいと感じる方向を向くようにしています。

また、土佐山という場所ではありますけど、その中で自由に動ける人達を相手にしています。その中で子どもってことを考えたときには、自分でひとりでは長距離の移動ができないという課題があり、どうしても小学校区単位ぐらいのフィールドじゃないと自分の意思で自由に動くことができないということがあり、僕たちの活動に対して、そこが課題だと思っています。

次に親子ってことを考えると、今度秘密基地づくりイベントを親子を対象として企画していて、そこでは親と子をくっつけるってことをやっていきます。ただ、それでもエリアを超えていくことができないんですよね。なんて言うんすかね、そういう企画をしても、子どもたちだけが本当に興味を持つてことはできないなど。

その中で、今回厳しい環境にあるっていうふうに考えたときに、どういふアプローチの方法があるのかって調べていた時に、今お手元に配った資料なんですけど、ちょっと極端な例なんですけど、NHKのスーパープレゼンテーションとかに出ているスガタ・ミトラさんっていう人が実験として、インドの田舎にパソコンを置いたという話です。パソコンの使い方はおろか、英語も分からない子ども達がどこまで学ぶことができるか、ということを実験したという話の動画です。興味があれば観ていただきたいです。この実験では、次第にグーグル使って検索し始めたり、だんだんとパソコンも使えるようになり、最終的には遺伝子のテストみたいなことを英語で出題しても、それに答えられるまでになっています。

結局何が言いたいのかというと、先ほどフィールドやアンテナの話もありましたが、アンテナを張ってない親に対してどうするかってことを頑張る方向と、子ども達に直接アプローチするっていう方法があって、先ほど紹介した実験はパソコンを渡しておいたら自然といろいろな新しいことが起きだした、ってことの研究結果のビデオで、極端な例ではあるんですけど、やっぱり面白いと人は学んだなっていうことです。僕らも社会教育という枠組みの中で、何とかしようという企画をしようというふうに思ってるんですけど、この研究では、子ども達を褒めてあげておばあちゃん役みたいなのがいて、「わ!すごいね!」、「自分が子どものころにそんなことできなかった。」、「何で君はそれができるの?」そう言ってあげるだけでテストの点数がどんどん上がっていくって結論があって、僕らが全部のカリキュラムを組まなくてもできちゃうって事実を受け、子ども達に対してどう働きかけていけばいいのだろう、ということに僕自身も今回この会で学びたいと思うし、何かそこに対してできることがあれば、まず自分たちもやってみたいなっていうふうに思ってます。

(委員長)

はい。ありがとうございます。社会教育の悪い面として、プログラム化とか、事業化とか、そういうところに行きがちなんですけど、環境、条件を整えておけば自然に人は学んだ。ただ、条件といたったときに、そこに囁く人とか、ちょっと促す人とか、褒める人とかがいるだけでいいんですよね。ガチッとしたプログラムを組まないといけないみたいなところにとらわれがちですけど、そうではないということですよ。

(委員)

これはパソコンを配ってる話なんですけど、これがもしかしたら図書館とか地域の方に生き字引の方がいらっしやってとか、そういうことだと思うんです。

(委員長)

そういうことなんですよ。

(委員)

環境づくりですもんね。はい。

(委員)

よろしいですか。それに加えてなんですけど、やはり厳しい環境下にあるターゲット(子ども達)を考えたとき、個人の問題は3割で、地域の環境が7割あると、公衆衛生の先生で、地域の繋がりを研究されてる方が言われていて、その環境をどう整えるかっていうところがすごく大事なことなんだろうなと思っています。地域の中に誰でも参加しやすい環境をつくることによって育っていく。先ほどのやっぱりインドの子ども達が本当にそれだったんだろうなと思うんですね。どうしても日本の社会っていうのは、親がいて子がいる、みたいなところからスタートして、昨今のいろんな課題に対して、地域の中でどう払拭していくかっていうことだと思うんですね。3月に高知県母性衛生学会で児童養護施設の院長先生が、厳しい環境下にある子ども達の生きる力を育むためにということで、性教育を少し取り入れたという話をされていました。男の子の部と女の子の部を1回だけ行ったそうです。本当に環境の厳しい児童養護施設に保護されている子ども達に、生きるための心の教育をわずか1時間ぐらい行ったんですね。そしたら、一番印象に残ったことというのは、子ども達が人生の設計とか、それから自分を大切にすることに関心を持った事だったりするのですが、思春期の自分達の心の変化や、コミュニケーションの持ち方にもすごく関心を持っていたんです。そこで、子ども達がしっかりと自分の将来に向けて計画を立てる参考になったとか、すごく将来のことについて考えられたとか、ちょっと大人が真剣に語ることによって、児童養護施設の園長先生は、子ども達の生い立ちを整備する機会を今までもてななかったとか、子ども達は自分の人生について真剣に向き合おうとしてる、そして自分のこと、まわりのことを知ろうとしている、といったことを気づかされたようです。

本当に厳しい環境下の中で育つ子ども達が、たった1時間ぐらいの講話からたくさん気づくことができたということは、やっぱりそういう周りの環境っていうのをどう整えていくか、我々がもうちょっと力を入れていかないといけないのかなあというのを気づかされたので、ちょっとご報告、ご紹介させてご紹介させていただきました。

(委員長)

ありがとうございます。土佐山アカデミーでは「ねえ、次、何して学ぶ？」っていうことで、学ぶ内容を自分達が決めていく。そのプロセスを決めるのは彼らであって、その環境をどう整えていくのが大事になるわけですよ。厳しいところに置かれていた彼らが話を聞くことで、自分を受け入れながら自分の将来を築いていくみたいな方向に向かっていくという話は、まさにそのための環境をどのように整えていったか良いかっていう話になるわけですね。そのときの視点と方法、いろいろ実践の中で、考えてらっしゃる事があるわけなんですよ。

(委員)

前回の社会教育委員会で発言させていただきましたけども、少し今の議論されているところと離れるかもしれませんが、僕は、社会教育はコーディネーター役が大事だとも思っています。

実はぼくもは30年位前に県教委がやられていた派遣社会教育主事のひとりです。その頃の市町村は本当に活気がありました。当時は社会教育主事とスポーツ担当の社会教育主事、の2通りの社会教育主事がいて、僕はいわゆる通常社会教育主事でした。

やっぱり、いろんなことを仕掛ける人間というのがいなくなったら、なかなかこれに向かっていくのは難しいんだ

って僕は思っています。なので、今の現状に戻ると教育支援センターというところで今年働かせていただいているので、今の私の立場を学校に知ってもらって、森田村塾の職員とSSW（スクールソーシャルワーカー）と3人で学校訪問をさせてもらっています。

うちのよな施設が前にでていくのはあんまり良いことじゃないのかも分かりませんが、本当は不登校の状況にある子ども達がいなくて一番いいんでしょう。ただ、現実には施設を必要とする子ども達があります。学校のすべての先生でなくても、うちの施設（森田村塾）が厳しい環境にある子ども達にとっての最後の砦ということを知って欲しいということを学校訪問でお願いしていく。待っててもそのことは伝わらないので、僕はうってでることが大切かなと思います。

社会教育を考えたときには、社会教育主事でも、そういう立場の人ができればいいんですけどなかなかそうはいかないことがあるんですが、古い取組といわれるものであったとしても、必要な取組なのであれば、取り入れることも必要なかなというふうには思っています。今の時代、古いことを言ってもいけない、という人も中にはいるかもしれませんが、やっぱり社会教育は人が企画していかなければいけないだろうと思っています。

機械に頼ってても社会教育はたぶん前に進まないだろうと。手法の一つに、ITをつかうのは必要でしょうけども、そこまでいく大きな企画ってところは、僕は人でやっていくべきだろうと思っているし、その役割というのがやっぱり社会教育主事だろうと思っています。

その社会教育主事は、これからは学校教育と必ず繋がる必要があると思っています。そのことは去年も言わせていただいたと思うんですが、学校教育と社会教育はこれから先は両輪で動かなければならない、と常々思っています。

冒頭でありましたが、今、高知県では地域学校協働本部、当時でいうと学校支援地域本部事業を活かした取組がスタートして、平行してコミュニティースクール、いわゆる学校運営協議会を立ち上げて学校に設置しています。

私は現場（小学校長時代）にいるときは絶対大事だと思っていました。なので香南市では一番はじめに学校運営協議会を設置しました。現在ようやく33年度（令和3年度）から香南市でも全部の学校に学校運営協議会を設置するという方向で動いているようです。やっぱそういうところの仕掛けとか、うってでるとかそういうことをやっていかなければ、ポイントだけみて、今不登校の子がいるよ、じゃあどうしようね、という課題を議論しても、なかなか解決に繋がらないのかなって私は思っています。なので、そういうところを周りから固めていけるような仕掛けをつくる。

で、今ちょうど青年団の方もおられるんですけど、わたしが社会教育主事をやっているときに一番先に赤岡に青年団をつくりました。赤岡の街は元気になりました。ところが3、4年経って僕が転出し、10年経った頃には青年団が潰れてしまいました。申し訳ないなあと反省をしたんですが、継続的に運営できるようなことを企画をしていなければならなかったのかなあと思っています。

仕掛けて動く地域が動くし、子どもにもいろんな課題に向いてもらえます。

昨年度の社会教育委員会でも発言しましたが、親地（おやじ）の会というものを立ち上げています。名前を聞くと、男の会みたいですが、そうではなく、「親」に地域の「地」を書いて親地の会。誰でも入れる会としています。そういうところから、若い人も入って欲しいということで、組織をつくりました。運動会や、赤岡小学校いろんなボランティア活動が行われる際には、親地の会で応援しようかってことになってLINEを情報共有の手法として利用しています。そういった手法にITを取り入れることはいいと思うのですが、実際に人が動く、というところを僕はこれからもやっていきたいなと思い、森田村塾、いわゆる教育支援センターの強みを使って、社会教育と一緒にやっていけばいいのかなというふうに思い、香南市すべての民生委員さんを森田村塾に来てもらいたいと考えています。森田村塾には森田祭りというのがあり、そこへ向けていろんな企画をしていかなければいけません。来年の1月頃ありますが、今は野市の民生委員さんしかいていておりません。子ども達は、旧5カ町村から通所してきているので、それぞれ旧5カ町村の民生委員さんに関わってほしいと思います。アタックをしつつあります。やっぱり学校は敷居が高くてよく言われるんですけど、元々は高いものではなく、受け入れることをしなかったら高く感じられるだろうと思うんですよね。だから、どんどん来てもらう。こっちはどうぞお願いしますっていうと、気軽に来てもらえるような状況ができる。そこからいろんな厳しい環境の子ども達に向けた

取組みや施策が生まれるのかなど、私は思っています。なので、まずはうち（森田村塾）のことを知ってもらおうということを今一生懸命やっているところなんです。

今議論されてるところに沿った内容になっているかわかりませんが、冒頭で委員長さんが言われたように、社会教育の団体、施設、職員、予算の内、僕は職員というところと予算というところが大事かなって思っています。やっぱりそういうところが確保できないとなかなかいろんなことを考えても前に進まないっていうのが現実だろうと思います。そういうところを自分なりに考えながら、何かいい方法はないのかなというふうに考えて今やっているところです。議論の中とちょっとずれたかもしれませんが。

（委員長）

いえそんなことはないと思います。ありがとうございます。森田村塾が地域の社会教育の拠点にこれから更になっていくっていう、その時代を一緒につくっていくという感じになるかもしれないですね。その中で社会教育主事がコーディネートしながら、どういう地域を塾を中心につくりだしていくかっていう、非常に大事な点があるかと思っています。それぞれの皆さんのところでやってらっしゃる実践も、そういう意味では、やっぱりどういう風にすればさらに広がっていくのか、社会教育としての拠点的なコーディネートをできるのかっていうところに繋がるのかなっていうふうに思います。

時間がもう限られてしまいましたけれども、稲生のPTCAでも、まさにそういったことをしながら稲生の地域づくりを担っていらっしゃるわけですね。

（委員）

稲生はほんとにちっちゃい集落なんですけどもPTCAということだけあって、地域の人が子ども達や学校に対してすごく支援してくれています。そこに保護者も入って、学校・地域・保護者の3つが一緒になって子ども達と体験したり、楽しく過ごすっていうようなことががすでに行われています。

ただ、親世代がちょっと変わってきたなと感じることもあります。私には20歳の息子と中学校1年生と小学校5年生の子どもがいるんですけど、20歳の息子の時は親世代は、学校にいる子ども達全員が楽しく、自分たちも楽しく横の繋がりを形成することができていて、何かをするときも、目的意識を共有して、みんなでやろうという風潮のがあったんですね。今会長として6年目に入ったんですけど、だんだんと、子どもは学校に行ったら学べるし、学校に行ったら地域からの支援もあって体験活動もできているんで、その子どもが習い事をする。自分の子どもはここでうまくいっている、だからさらにみんなで何かをやろうよってなった時には、「まあいいか」となる親が多くなってきたと感じます。おそらく子どもの中でも、「これ行ってみたいな」って思っても、親が手紙をみて、「いいわ」ってしてるのが実際あると思うんですね。

PTCAの活動の中で、年間1回親子行事ということで、親子で一緒になんかをしましょうというふうにしてるんですけど、「親と一緒にいかんといかんがか、じゃもうやめよう」っていうふうになったら子どもがかわいそうって思い、子どもさんだけでも参加は可能ですのでということで学校の先生にも活動に入らせていただいています。去年度は高知大学の地域協働学部の先生に来てもらって、植物の繊維を使って、タペストリーをつくりました。子どもたちも「すごい！」っていいながらももう石でたたいたりですとか、とにかく楽しく、親も子どもより必死になっていいものをつくってやろうって思って熱中していました。

私のモットーは、親が楽しめない子どもも楽しめないということですので、私は自分の休みがあったとしても、その時に何かイベントがあったら休みはつぶれてしまうけど、そこで親が楽しく過ごしてたら子どもも必然的にそういう親の背中を見てではないけど、楽しく子どもも楽しく過ごせるのかなと思っています。そういったことを広げていこうと、ちょっとずつですけど、なにかないかなと思いつつフェイスブックで情報発信してみたりしています。

稲生には14の小さい地区があって、うちの立石地区はわりと年配の人から若い人まで仲が良いんですね。何かやろうって言ったら「じゃあないやれやれ」っていう感じでやるんですけど、やっぱりその中でも、私の年代層が地区民運動会であつたりとか地区でバレーとかソフトボールとなったときに出てこなかったりするんですね。これじゃいかんと思い、「私もすごい下手くそやき、大丈夫やき一緒に楽しくやろうや」とLINEでグループを作ったり、回覧版でこの地区でこんなイベントしましたとか、稲生地区全体ではこんなことしましたとか、次こん

なことやろうとしています、こんなことを考えています、っていうような発信を、中には「またが回覧まわってきた」って思う人もいるかもしれないですけど、懲りずに周知していく。自分の親世代はすごく仲が良くてきずなが強いんですね。

なんかこう、何も縛りがないというか自由にいろんなことができてたのか、そこがわからないんですけど、やっぱり楽しく繋がることができているということで、その世代の人達を中心になって私達も入っている盛り上げているんですけど、じゃあこの人達がいなくなった時に、立石地区はどうなるのかとか、稲生地区は、ってなったときにこのままじゃいかんと思ひ、横の繋がりを何とかしようと、出てこれる時だけでも一緒にやろうやっっていうような周知の仕方はしてるんですけど、なかなか上手くいかないっていうところがあります。

(委員長)

ありがとうございます。やっぱり長年経験されていると自分の世代ともうちょっと下の世代の方との付き合いの中でいろんな変化と悩みがあり、それを何とかこう繋ぎとめるっていうか、いつも一緒だよっていうような事を考えながらの運営をずっとされているという、それは大事なことですよね。というようなお話でこれも一つ稲生としての、地域、社会教育実践の姿かなと思っております。

今日は第1回目ということで、テーマの設定趣旨、そして現状の整理の中でこの会議の方向性のようなことで順次意見を出していただきましたけれど、案外こう、整理できてきたんじゃないかなというふうに思います。

そういったことも含めて次回、事務局からもご提案ありましたけれども、現地視察ということをしてしながら、同じものを見ながら、また協議をしていくようなスケジュールを考えております。ここで一旦、事務局の方に進行をお返しします。

【事務局より次回視察先（案）について説明】

委員からは了承され、別途日程調整することとなった。

5 閉会

生涯学習課長挨拶